

書評

初歩から学ぶヒトの生物学 (第2版) ▶ A. Damon, R. McGonegal, P. Tosto, W. Ward 著,
八杉貞雄 監訳, 中村和生, 萬代研二, 八杉徹雄 訳

初歩から学ぶヒトの生物学 (第2版) / A. Damon, R. McGonegal, P. Tosto, W. Ward 著, 八杉貞雄 監訳, 中村和生, 萬代研二, 八杉徹雄 訳 / 東京化学同人 2022 / B5判変型 224ページ 2,700円+税

医学部で新入生に生物学を教える身には、春は毎年のように悩ましい時節である。筆者の所属大学では、概ね7割の学生が高校生物を履修しておらず、多くの学生がもつ生物学の知識は高校『生物基礎』の範囲の理解も怪しい状態である。一方、昨今の臨床重視のカリキュラムでは、臨床実習に多くの時間が割かれ、玉突き式に低学年での学修内容が圧縮されつつある。かつては2学年の科目だった解剖実習は、1学年後期に実施されている。専門科目を学修するための準備期間は、入学後1年から6か月へと半減してしまった。これに対し、多くの医療系学部が、入学後に高校生物非履修学生向けに速習のための講義を組んで対応していると思われる。問題はその教材である。高校の教科書を使用するのが王道であるが、小判とはいえ生物基礎と生物を併せて600ページ以上ある内容を、短期間で読み進めるのは非常に難しい。より手に届きそうな目標設定ができる教材が必要だと常々感じてきた。

前置きが長くなったが、本書は世界各国で共通に定められた教育プログラムとして知られる国際バカロレアのディプロマ・プログラム (DP) に準拠した教科書を元にした訳書である。ただし、訳書とはいえ大幅な内容の取捨選択をし、日本の医学医療看護系学生の基礎学習用にアレンジが施されており、本訳書自体が認定されているわけではない。DPは16～19歳が対象のプログラムであり、内容も日本の高校で学習する生物学に近い。本訳書の最大の特徴であり、おそらく訳編者が最もこだわり苦心した点だが、200ページに収めた点ではないだろうか。1回10ページでも全20回で終わる無理のない授業プランが想定できる。しかし、なぜこれほどコンパクトに仕上げられたのだろうか。その答えは、例えば胚発生のページを見るとわか

る。日本の教科書では大きく扱われているウニやカエルやニワトリの発生に関わる記載がなく、ヒトの発生がシンプルに解説されている。ご自身の専門分野である発生学の記述を切り捨てることは、監訳者にとっては苦渋の決断であり、監訳者による有名な実験になぞらえればまさに断腸の思いだったに違いないが、英断であった。海に囲まれた日本は、初期発生の分野で強固な研究教育基盤が築かれており、それは日本の最大の強みのひとつでもある。生物学の研究者・教育者を養成する上で秀でた内容は、しかし、必ずしも生物学を専門としない医療分野の実務者の養成には必須ではない。

一方、本書は、内容を削ぎ落とすだけでなく、限られた紙面の中で、日本の高校生物の教科書にはない項目を扱っている。ひとつは、性や生殖に関する内容である。性教育の遅れが目立つ日本では、思春期の生徒を対象として性を扱うことが難しいのだろう。性や生殖は保健体育で扱われており、「縦割り」の壁に阻まれて高校生物では扱われないうえ、これに対し、本訳書では例えばシルエットではあるが生殖器の挿絵もあり、医学に必要な基礎を正当に扱っている。同様に、高校生物の教科書にはウイルスや感染症の記述が少ない。ウイルスは生物ではないからという理由もあるが、感染症は保健体育で扱われるためでもある。さらに、腎臓の病気と治療、脳病変、剖検、向精神薬や麻薬の影響、麻酔薬といった、日本の教科書ではおよそ見られない医学の基礎知識が扱われているうえ、用語や漢字表記も医学に寄せた。この点は、高校生物の履修者にとっても、高校生物の知識を医学の理解に役立てるための橋渡しともなるだろう。

惜しむらくは、通常はコラムなどで紹介されるであろう話の枝葉が、本訳書では削ぎ落とされてしまっている。授業では教員がそれぞれの得意分野の挿話で、学生の興味を喚起する必要があるだろう。とはいえ、汎用性のある必要十分な内容が詰め込まれた良書である。

(松田 学 近畿大学医学部医学基盤教育部門)